

「憐れみと縛り首：ヨーロッパ史のなかの貧民」 プロニスワフ・ゲレメク著 早坂真理訳

著者	田中 俊之
雑誌名	史林
巻	77
号	2
ページ	325-327
発行年	1994-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/12045

紹介

プロニスワフ・ゲレメク著
(早坂真理訳)

『憐れみと縛り首——ヨーロッパの史のなかの貧民』

本書は、Bronisław Geremek, *Łitość i szubienica: Dzieje nędzy i miłosierdzia, Czyelnik / Warszawa, 1989.* の邦訳である。脱稿されたのは一九七八年であるが、本国ポーランドでの出版は、イタリア語版(一九八六年)、フランス語版(一九八七年)、ドイツ語版(一九八八年)の刊行を経た後のこととなった。本書はこのポーランド語版からの翻訳である。

ポーランドを代表する中世史家である著者ゲレメクは、中世後期のバリにおける周縁集団を扱った研究等によって日本でも知られているが、同じく周縁集団研究を手がけたF・グラウスによれば、その成果は今日すでに古典的地位にあるという。著者の眼は一貫して権力エリートのもとで瘡げら

れ排除されてきたいわゆる下層民衆、とりわけ「労働する人々」に向けられており、本書においてもその眼差しは変わらない。本書において中心に据えられているテーマは貧困および貧民であるが、著者の関心は中世以来のヨーロッパ社会が貧困および貧民に対してどのような態度を取ってきたのかにあり、その意味で本書の特色は貧困の歴史そのものではなく、むしろ貧困という現実と直面して多様に変化しながら展開された慈善の思想と実践のあり方を数百年間の時間枠のなかで広く考察しようとする点にある。では簡単に本書の概要を見てみよう。

第一章「はじめに——貧困の烙印と貧困への態度」では、近代諸科学において貧困をめぐる問題が取り扱われてきた視点をふまえて、本書で扱われるのは貧困に対する社会心理的態度であり、一四世紀以来、拡大する貧困という現実に対する社会的要請に合わせて権力者や諸機関による社会政策が具体的措置として取られ、思想プログラムがつくられたという見通しが確認される。

第二章「中世——貧民は必要か」では、

中世において貧困が有していた精神的価値とは逆腹に、物質的貧困の深刻化という現実が社会の態度をどう変化させたかがたどられる。キリスト教倫理に基づく自発的なつましざの実践とそれに対する慈善の賛美は教会を中心とする救済計画を制度化していったが、現実の物質的貧困に対しては社会を破壊するもの、墮落というネガティブな評価しかなされず、社会的名誉という点からはつましざと価値を共有するということなかった。さらに中世後期の農村社会および都市社会における経済・社会構造の転換を背景とした貧困の拡大によって貧民が急増し、社会の周縁化が進行する。かかる現実的課題に対し当局は貧民を身分集団として再編するなどの対応を迫られることとなった。

第三章「近代社会と貧困」では、その後一六世紀に顕在化する貧困および貧民に対する姿勢の変化の背景が中世後期から近世への移行期における社会変動とその影響のなかに探られる。著者がその決定的な転機と見ているのは、ペストなどによる中世後期の危機と初期資本主義的発展にともなう農業システムおよび社会構造の変化である。

その影響は農村のみならず都市へも波及した。

第四章「新しい社会政策」では、大卒して流入する貧民を抱えきれなかった都市が一五二〇年代を中心にいかなる政策転換を行っていたか、その際の思想はどのようなものであったかが考察される。そこには人口増大と食糧不足のあいだの矛盾が顕在化していた。かくして貧民に対する間断のない抑圧処置が取られることになるが、その根底には社会的騒乱の脅威と貧困層の規模の拡大に対する恐怖が存在していた。その際、原則として在地の物乞いの面倒は見てもそれ以外の物乞いは排除され、しかも救済の対象となる物乞いは労働能力のない者に限られた。しかし、繰り返しされる縛り首の威嚇に見られる諸政策の厳格さは、物乞いに対する伝統的な心理的態度の破壊と同時にこうした措置が実効性をもたなかったことを示している。その結果、都市生活から物乞いを一掃するというプログラムのもとに労働の強制が予告されはじめた。

第五章「貧民の収監」では、それを受けて近代ヨーロッパが物乞いに対する社会政策を実施する手段として頂点をなした監獄

の役割が説明される。その先駆となったのは、物乞いをキリスト教徒の生活習慣と矛盾する不道德な存在として排斥する反宗教改革のプログラムを掲げたイタリアである。このことは怠惰を一掃し貧民を強制労働させる形で救貧院や総合病院に収監するシステムを取ってヨーロッパ各国に普及していた。

第六章「現代世界と貧困」では、一八世紀以降、工業化にともなう貧困の問題の捉え方がどう変化していったかがたどられる。著者の問題関心は貧困の問題と労働問題が緊密な結びつきをもった一九世紀から、二〇世紀における貧困の問題、とりわけ第三世界に対する国際援助の抱える問題にまで及ぶ。

結び「憐れみの歴史」では、従来の研究の視角に対する反省をふまえ、著者は慈善の行為というものが人間の感情に深く根ざしている以上、貧困に対する姿勢の歴史を理解するには「感情の歴史」の地平を拓く必要があると説き、今後の研究の可能性を示唆する。

以上のように、貧困というなおざりにしえない今日の課題について中世から現代ま

でを眺望した著者の見通しの鋭さと視野の広さには脱帽させられる。長い時間枠のなかで考察したことについては、本書でたびたび触れられているごとく、変化というのが草線的に一方向にのみ進むものではないこと、本論に即していえば、慈善行為が縛り首の恐怖に交替したのではなく、それが弱まる時期と強まる時期とが交互に現れ繰り返しされる、すなわち長期波動を見なければならぬという著者の確信によって正当化されよう。また貧困に対する問題関心の原点にはキリスト教典礼に見られるつましさの賞賛とは裏腹に、近代社会誕生の過程で貧民の排除あるいは周縁化が軽蔑や恐怖をともなうて進行したこと、さらには現代世界の抱える貧困がなお未解決であることへの憂慮が見受けられる。したがって著者が単に歴史的考察対象として貧困というテーマを選んだのではないということには留めておかねばならない。それだけに本書の内容に重みを感じられるのであり、著者のメッセージを汲み取る必要がある。本書の意義もそこに集約されよう。ただ、本書に豊富に散りばめられている大胆な解釈はそれ自体が大いなる魅力であるが、テ

「マ」の性格上、史料に現れにくい側面も強く、その点の実証性に関して懸念は残る。「感情の歴史」の地平を拓くにはどうすればよいのかという問題とともに今後われわれの課題となろう。

最後に、難解なボーランド語からわかりやすい日本語に翻訳された訳者に対し敬意を払うとともに、訳者の「あとがき」によってボーランド史学の潮流も知ることができること感謝したい。一度ならず精読を勧めたい著作である。

(A5判 三九〇頁 一九九三年四月
平凡社 五〇〇〇円)

(田中俊之 京都大学大学院生)

おわびとお願い

前号(七七巻一号)の伊藤之雄氏の論説「元老制度再考——伊藤博文・明治天皇・桂太郎——」に乱丁という重大なミスが生じてしまいました。

五・六ページと七・八ページの順番が入れ違っておりまして、伊藤氏の御論文を読まれる時はその点ご配慮お願いいたします。

この乱丁が発見されたのはすでに発送したあとでしたので、当該号を回収できず、皆様のお手元には乱丁の『史林』がそのまま届いてしまいました。政治過程の分析を中心とした御論文であるだけに、乱丁のために読みづらくなることの問題が大きいのはここで改めて強調するまでもありません。このようなミスは学術誌の刊行には決してあってはならないことです。執筆者の伊藤氏ならびに会員各位に多大なご迷惑をおかけしたことを深くおわび申し上げます。今後このようなミスが再発しないようにチェック・システムを再検討し、さらに細心の注意をはらっていく所存です。

『史林』編集委員会

編集後記

七七巻二号をお届けいたします。食卓に輸入米が出回り、食物についていろいろと考えさせる今日この頃です。偶然でしょうが、本号には清代の食糧暴動に関する論説が載っております。主食をめぐる意識や政策が変わっても、結局農作物の生産が天候に左右され、人間の意のままにならないという状況は変わらないのだということを痛感いたします。

(北)

本誌には文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費が交付されております。

一九九四年 二月二五日印刷 定価二二〇〇円
一九九四年 三月一日発行 送料五二円

史 林 第七七巻第二号(通巻第三八四号)

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

発行人 史 学 研 究 会

振替京都七一一五五番
理事長 朝 尾 直 弘

印刷所

京都市下京区七条御所ノ内町五〇
中村印刷株式会社